

屋島

やしま



撮影・「屋島」吉越研

〈あらすじ〉

春の夕暮れ、都の僧が屋島を訪れると、漁を終えた漁翁と漁夫が塩屋に戻ってくる。漁翁は都の僧と聞いて僧たちを塩屋に招じ入れ、屋島におけるかつての景清と三保谷の一騎打ちのさまを語り、「よし常の憂き世の夢ばし覚ましたまふなよ」と義経であることをほめかして姿を消す（中入）。浦人が景清と三保谷の一騎打ちをあらためて語ったあと（居語り）、僧の夢中に義経の亡霊が現われる。義経はなお現世に執心が残っていると言い、この屋島の合戦で弱い小弓を海に流してしまつたが、一命を顧みず弓を取り戻したのは、武士としての名譽のためだったと明かす（居グセ）。やがて修羅道の時刻となり、義経が生前の敵能登守教経と戦ううち、夜も明け、僧の夢も覚めるのだった。

（天野文雄『能楽手帖』角川ソフィア文庫、二〇一九年から）

〈一セイ〉

シテ「月の出汐の沖つ波

ツレ「霞の小舟、こがれ来て

シテ「海土の、呼び声

シテ、ツレ「里近し

〈サシ〉

シテ「一葉万里の船の道、ただ一帆の風に任す

ツレ「夕べの空の雲の波

シテ、ツレ「月の行方に立ち消えて、霞に浮かむ

松原の、影は緑に映るひて、海岸そこも不知火

の、筑紫の海にや、続くらん

〈下ゲ歌〉

シテ、ツレ「ここは屋島の浦伝ひ、海土の家居も

数々に

〈上ゲ歌〉

シテ、ツレ「釣りの暇も波の上、釣りの暇も波の上、

霞み渡りて沖行くや、海土の小舟のほのぼのと、

見えて残る夕暮れ、浦風までも長閑なる、春や心を誘ふらん、

春や心を誘ふらん

シテ「まづまづ塩屋に帰り休まうずるにて候

3

〈問答〉

ワキ「塩屋の主の帰りて候、宿を借らばやと思ひ

候、いかにこの塩屋の内へ案内申し候

ツレ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「行き暮れたる修行者にて候、一夜の宿をお

ん貸し候へ

詞章

上演詞章

1【次第】

〈次第〉

ワキ、ワキツレ「月も南の海原や、月も南の海原や、屋島の浦を尋ねん

〈名ノリ〉

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候、我未だ西国を見ず候ふほどに、ただ今思ひ立ち西国行脚と志し候

〈上ゲ歌（又ハ道行）〉

ワキ、ワキツレ「春霞、浮き立つ波の沖つ舟浮き立つ波の沖つ舟、入日の雲も照り添ひて、そなたの空と行くほどに、通々なりし舟路経て、屋島の浦に着きにけり、屋島の浦に着きにけり

〈着キセリフ〉

ワキ「急ぎ候ふほどに、屋島の浦に着きて候、日の暮れて候ふほどに、これなる塩屋に立ち寄り、宿を借らばやと思ひ候

ワキツレ「尤もにて候

2【一声】

〈サシ〉

シテ「面白や月海上に浮かんで波濤夜火に似たり

ツレ「漁翁夜西岸に傍うて宿す

シテ、ツレ「暁湘水を汲んで楚竹を焼くも、今に知られて芦火の影、ほの見え初むる、もの凄きよ

1 僧、從僧の登場

都の僧が西国行脚のため海路四国に渡り、屋島の浦に到着する。

僧、從僧 月もこれから赴こうとしている南海道のほうに移動している。さあ、わたくしたちも屋島の浦を尋ねることにしよう。

僧 拙僧は都からやつてきた僧です。わたくしはまだ四国を見たことがないので、このたび思い切つて西国への行脚を志しました。

僧、從僧 春霞がたなびき、波も浮き立つようにみえるこの時節、夕暮れ時の雲に夕日があたっている沖を、あの方角が四国だと思つて進んでゆくと、はるかな船路を経て、屋島の浦に到着しました。

僧 航路を急いだので、はや讃岐の国屋島の浦に着きました。日も暮れたので、ここにある塩屋に立ち寄つて、一夜を明かそうと思います。

從僧 それがようございましょう。

2 漁翁、漁夫の登場

春の夕暮れ時、漁翁と漁夫が沖での漁を終えて海から屋島の浦に帰ってくる。

漁翁 ああ、なんと風情のある景色だろうか。ある詩に、「月が海上に浮かんでいるので、波が夜火のようにみえる」と詠まれているような景色です。

漁夫 やはり、ある詩に、「漁翁は夜、西の海辺で泊まり……」。

漁夫 どなたでいらっしゃいますか。

僧 諸国一見の僧ですが、一夜の宿をお貸しください。

漁夫 しばらくお待ちください。主人に申し継ぎますので。

申しあげます。諸国一見の僧が一夜の宿を借りたいとおっしゃっています。

漁翁 それはたやすいことだが、あまりにむさ苦しいところなので、お宿をお貸しすることはできないと伝えてくれ。

漁夫 お宿のことをお伝えしたところ、あまりにむさ苦しいところなので、お貸しできないのとことです。

僧 いやいや、むさ苦しいのはかまいません。とりわけ拙僧は都の者で、この浦にはじめて訪れたのですが、日が暮れたので、なにとぞ一夜をと、もう一度お伝えください。

漁夫 承知いたしました。

仰せのとおり伝えたところ、旅人は都の人でいらっしゃるつて、日が暮れたので、何とか一夜の宿をと、重ねておっしゃっています。

漁翁 なに、旅人は都の人だと言うのか。

漁夫 さようでございます。

漁翁 それはお気の毒なこと、それでは、お宿をお貸ししよう。

漁夫 この住み家は、もとよりそまつな芦の家ですが。

漁翁 ただ飯の草枕とお思ってください。

漁夫 そのうえ、今宵は、歌に「照りもせず」。

漁翁 「曇りも果てぬ春の夜の」。

漁翁、漁夫 「朧月夜に敷く物ぞなき」と詠まれているような春の夜です。この歌のように、お気の毒ですが、この屋島の苦屋には敷くものとしてなく、あるのはこの屋島に立つ高松に生えている苔のような筈くらいです。

それでも、この浦には人を慰めるものがあります。それは牟礼という浦の名です。そこに群れている鶴をご覧ください。あの鶴たちはいずれ都に戻

るのです。旅のお僧の古里も都と聞くと懐かしい
思いにとらわれます。じつはわれわれもとは…。
そう言って、漁翁と漁夫はそのまま涙にむせぶ
のだった。

4 漁翁の物語

漁翁は僧の求めに応じて、かつての屋島における
悪七兵衛景清と三保の谷の一騎打ち（鑑引き）の
さまを語る。

僧 ところで、なんとなく拙僧には似つかわしく
ない所望ですが、この場所は昔の源平の合戦の場
と聞いています。そのありさまを、夜もすがら語っ
てお聞かせください。

漁翁 お安いご用です。語ってお聞かせいたし
ましょう。

さて、その合戦の時は元暦元年三月十八日のこ
とでありましたが、平家は一町ばかり沖の海上に
船を浮かべ、源氏はこの海岸に打って出ました。大
將軍のご装束は赤地の錦の直垂に紫裾濃の着背
長の鎧姿でした。そうして、鎧を踏ん張って馬の鞍
に立ち上がって、「一院のおん使、源氏の大將檢非
違使、五位の尉、源の義経」と名乗られたそのよ
うすは、まことに立派な大將だと思いました。が、
そのことがいま眼前に思い出されます。

漁夫 そのとき、言葉戦いも終わってから、平家の
方より兵船が一艘漕ぎ寄せてきて、その船から武
者が波打ち際に降り立って、海岸の敵を待ちかま
えていました。

漁翁 すると、続いて源氏の方からも五十騎ほど
の武者が押し寄せてきました。そのなかでも三保
の谷の四郎と名乗った武者が真っ先に進んできた
かと思うと。

漁夫 平家方の武者も悪七兵衛景清と名乗って、
三保の谷を相手に戦ったのです。

漁翁 かの三保の谷は、その時、太刀を折ってしま
い、しかたなく少し汀に退いたところ。

うでもよいではありませんか。ともかく、このはか
ない憂き世の夢をお覚ましになりませんように。

6 浦人の物語

塩屋の本当の主の浦人がやってきて、正中に座し
屋島合戦における景清と三保の谷の一騎打ちの
ことを僧に語り、塩屋を宿に提供しようと言って、
立ち去る。

7 僧の待受

僧は塩屋で一夜を明かして義経の出現を待つ。

僧 これは不思議だ。ただいまの老人に、その名
を尋ねたところ、「よし、常の世の夢を覚まさない
で待つ」との答え。

僧、從僧 その声は老人のものでしたが、こうして
いるうちに、浦風も強くなり、夜も更けてしまし
た。それでは、松の根を枕にして、苔を筵として、
あらためてかの者が夢中に現れるのを待つことに
しよう。

8 義経の登場

義経の亡霊が甲冑姿で僧の夢中に現われる。

義経 ある師家の偈に、「落花枝に帰らず、破鏡ふ
たたび照らさず」と詠まれているとおり、いちど
死んだ者は生き返ることはないのです。けれども、
なお現世への執着から生まれる怒りのために、死
んで鬼神となつたわたくしは、ふたたび魂魄を備
えた姿に戻って、自身でわが身を苦しめて、この修
羅の巷である現世に帰ってきたのです。これも思
えば前世からの浅からぬ因縁だと思います。

《歌》
地へ鉢附の板より、引ききぎつて、左右へくわつ
とぞ退きにける、これを御覧じて判官、お馬を汀
に打ち寄せ給へば、佐藤継信、能登殿の矢先にか
かつて、馬より下にと落とれば、船には菊王
も討たれければ、共に哀れと思しけるか、船は沖
へ陸は陣に、相引に引く汐の、後は閑の声絶えて、
磯の波松風ばかりの、音淋しくぞなりにける

5

《ロンギ》
地へ不思議なりとよ海士人の、あまり委しき物
語、その名を名のり給へや

シテへ我が名を何と夕波の、引くや夜汐も朝倉
や、木の丸殿にあらばこそ、名のりをしても行か
まし

地へげにや言葉を聞くからに、その名ゆかしき
老人の

シテへ昔を語る小忌衣

地へ頃しも今は

シテへ春の夜の
地へ潮の落つる暁ならば、修羅の時になるべしそ
の時は、我が名や名のらん、たとひ名のらずとも
名のるとも、よし常の浮世の夢ばし覚まし給ふな
よ、夢ばし覚まし給ふなよ

9

《掛ヶ合》

ワキへはや暁にもなるやらんと、思ふ寢覺の枕よ
り、甲冑を帶し見え給ふは、もし判官にましま
すか

シテ「我義経が幽霊なるが、瞋恚に引かるる妄執
にて、なほ西海の波に漂ひへ生死の海に沈淪せり
ワキへ愚かな心からこそ生死の、海とも見ゆ
れ真如の月の

シテへ春の夜なれど曇りなき、心も澄める今宵の
空

ワキへ昔を今に思ひ出づる

シテへ船と陸との合戦の道

ワキへ所からとて

シテへ忘れ得ぬ

《上ヶ歌》
地へ武士の、屋島に射るや櫓弓の、屋島に射るや
櫓弓の、元の身ながらまたここに、弓箭の道は迷は
ぬに、迷ひけるぞや、生死の、海山を離れやらで、
帰る屋島の根めしや、とにかくに執心の、残りの海
の深き夜に、夢物語申すなり、夢物語申すなり

10

《クリ》

地へ忘れぬものを閻浮の故郷に、去つて久しき年
波の、夜の夢路に通ひ来て、修羅道の有様現すなり
《サシ》

シテへ思ひぞ出づる昔の春、月も今宵に冴え返り
地へ元の渚はここなれや、源平互に矢先を揃へ、

漁夫 景清は三保の谷を追いかけて。

漁翁 三保の谷が着けていた兜の鍔を掴んで、後
ろへ引つ張ったのです。

漁夫 それにたいして三保の谷も。

漁翁 逃れようとして、前に行こうとしたのです。

漁夫 そうして、たがいに「えいや」と引き合った
のです。

漁翁 しかし、たがいに引く力が強くて、鉢付の
板がひきちぎれてしまい、二人は左右にどっと引
き分かれました。判官はこれをご覧になって、お馬
を汀に進められたのですが、そのとき、佐藤継信
が能登殿の矢に射られて、馬から下にとどろち
てしまいました。一方、平家方の船では、能登殿の
童の菊王丸も討たれたので、両軍ともこれをあわ
れと思つてか、平家の船は沖に、陸の源氏は陣に、
相引に退いたのです。そのあとは、両軍の閑の声も
聞こえなくなつて、磯の波音と松風の音だけが淋
しく聞こえるばかりでした。

5 漁翁の中入

漁翁は僧に問われて、義経であることをほのめか
して姿を消す。

僧 これは不思議だ。海士にしてはあまりにくわ
しすぎる物語です。その名をお名乗りください。

漁翁 わたくしの名をお聞きになりたいとのこと
ですが、歌に、「朝倉や木の丸殿にわれをれば名乗
りをしつ行くは誰が子ぞ」と詠まれています。こ
こが九州の木の丸殿なら名乗りもいたしましよう
が、ここは屋島ですので…。

僧 なるほど、このような返答を聞くにつけ、いよ
いよ老人の名を知りたく思います。

漁翁 こうして昔の判官殿のおんことを語ってい
ると、時節はおかしも春の夜ですが、潮が引く明
け方には、修羅道での閻浮の時刻になります。その
時になつたら、わが名を名乗ることにしよう。しか
し、名乗らなくても、名乗っても、そんなことはど

9 義経、僧の応対

義経は現世に執着が残っているため、いまなお西
海の海に沈んでいるのだと言って、昔のことを語
ろうと言う。

僧 これは不思議だ。はや明け方にもなろうかと
いう寢覺めの枕元に、甲冑を帶してお見えになつ
たのは、もしや判官殿でいらつしやいますか。

義経 わたくしは義経の幽霊ですが、怒りのため
に、この世に妄執が残つてしまい、いまなおこのよ
うに西海の波に漂つて、現世の迷いの海に沈んでい
るのです。

僧 おろかなことをおっしゃつてはなりません。
物事は心の持ち方しだいで、生死の海とも見え、
また、真如の月とも見えるのですから。

義経 今宵は春の夜ですが、珍しく曇りもなく、
月も鮮やかです。その月のように、今宵は空もわ
が心も澄み切っています。

僧 それで昔のことを思い出したのですか。

義経 さよう。海上の船との合戦を思い出しました。

僧 場所もここですね。

義経 ええ、多くの武士たちが弓を射て闘ったこ
の屋島を忘れることができずに、昔の姿のまま、
またここに戻ってきたのです。わたくしは、弓矢の
道では迷うことはありませんでしたが、死後は迷
つてしまい、現世という迷いの世界を離れることが
できずに、こうして屋島に帰ってきたのは、思えば
恨めしい。ともあれ、この世に深い執心を残したま
ま、この深夜に夢のようにはかない物語をいたそ
うと思うのです。

10 義経の物語

義経の亡霊は、屋島の合戦で海に弓を流してしま
つたこと、命の危険を顧みずその弓を取り戻そう
としたことを語り、それは武士としての名誉を重
んじたためだと言う。

義経 ああ、この婆婆が忘れられませんか。この婆
婆を去つてから久しい年月が経っているのですが、

4

《〆》

ワキ「いかに申し候、似合はぬ申し事にて候へども、
この浦は源平両家の、合戦の巷と承り及びて候、
夜もすがら御物語り候へ」

シテ「易き間の事語つて聞かせ申し候へし

《語り》

シテ「いでその頃は元暦元年三月十八日の事なり
しに、平家は海の面一町ばかりに船を浮かめ、源
氏はこの汀にうち出で給ふ、大將軍の御出立には、
赤地の錦の直垂に、紫裾濃の御着背長、鎧踏ん張
り鞍笠につつ立ち上がり、一院の御使、源氏の大
將檢非違使五位の尉、源の義経と、名のり給ひし
おん骨柄、あつばれ大將やと見えし、今のやうに、
思ひ出でられて候

《掛ヶ合》

ツレへその時平家の方よりも、言葉戦ひ事終り、
兵船一艘漕ぎ寄せて、波打際に下り立つて「陸の
敵を待ちかけしに

シテ「源氏の方にも続く兵五十騎ばかり、中にも
三保の谷の四郎と名のつて、真先かけて見えし所に
ツレへ平家の方にも悪七兵衛景清と名のり、三保
の谷を目がけ戦ひしに

シテ「かの三保の谷はその時に、太刀打ち折つて
力なく、少し汀に引き退きしに
ツレへ景清退つかけ三保の谷が
シテ「着たる兜の鍔を掴んで
ツレへ後ろへ引けば三保の谷も
シテへ身を連れんと前へ引く
ツレへ互ひにえいやと
シテへ引く力に

6

《間の段―下段に概略》

7

《〆》

ワキ「ただ今の老人の、よし常の世の夢心、覚まさ
で待てと聞えつる

《上ヶ歌（又ハ待謡）》

ワキ、ワキツレへ声も更け行く浦風の、声も更け
行く浦風の、松が根枕そばだてて、思ひを延ぶる
苔衣、重ねて夢を待ち居たり、重ねて夢を待ち居
たり

8【一声】

《サシ》

シテへ落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず、然れ
どもなほ妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境界に帰り、
我とこの身を苦しめて、修羅の巷に寄り来る波の、
浅からざりし業因かな

船を組み駒を並べて、うち入れうち入れ足並に、鎧を浸して攻め戦ふ

〔掛ケ合〕

シテ「その時何とかしたりけん、判官弓を取り落し、波に揺られて流れしに

地「その折しもは引く汐にて、遙かに遠く流れ行くを

シテ「敵に弓を取られじと、駒を波間に泳がせて、敵船近くなりし程に

地「敵はこれを見しよりも、船を寄せ熊手に懸けて、既に危く見え給ひしに

シテ「されども熊手を切り払ひ、終に弓を取り返し、元の渚にうち上れば

〔サシ〕

地「その時兼房申すやう、口惜しのおん振舞やな、渡辺にて景時が申ししも、これにてこそ候へ、たとひ千金を延べたる御弓なりとも、おん命には代へ給ふべきかと、涙を流し申しければ、判官これを聞き召し、いやとよ弓を惜しむにあらず

〔クセ〕

地「義経源平に、弓矢を取つて私なし、然れども、佳名は未だ半ばならず、さればこの弓を、敵に取られ義経は、小兵なりと言はれんは、無念の次第なるべし、よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極めと思ふべし、さらずは敵に渡さじとて、波に引かるる弓取の、名は末代にあらずやと、語り給は兼房、さてその外の人までも、皆感涙を流しけり

シテ「智者は惑はず

地「勇者は懼れずの、弥猛心の梓弓、敵には取り伝へじと、惜しむは名のため惜しまねは、一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき、弓筆の跡なるべけれ

それでこうして深夜にお僧の夢に現われて、修羅道のありさまをお見せするのです。

思い出したぞ、昔の春を。あの時は月も今宵のように冴えわたっていた。昔の渚はここなのです。

源平の兵は互いに矢先を揃え、一方は船で陣を組み、一方は陸で馬を並べていたのですが、源氏の武者は次々に前へ進み、一足ごとに轡を海水に浸して攻め戦ったのです。

その時、どうしたとか、わたくしは弓を取り落として、弓は波に揺られて流れていった。ちょうど引き潮だったので、弓ははるか遠くに流れていったのだが、「敵に弓を取られまい」と思い、馬を波間に泳がせて、敵船の近くまで行つてしまったのです。敵はこれを見て、船を判官に近づけて、熊手に手をかけたので、命も危うく見えました。しかし、わたくしは熊手を切り払つて、ついに弓を取り返して、もとの渚にうち上ったのです。

その時、股肱の臣の兼房が、「残念なお振舞いでございます。摂津の渡辺で梶原景時が申したのも、このことだったのですね。たとえ千金を延べて作つた弓であつても、おん命と代えることができますか」と、涙を流してお諫め申しあげたので、判官はこれを聞いて、「いやいや、弓を惜しんだのではない。義経は源平の合戦に弓矢を取つて戦つたが、それには私心というものはなかった。しかし、わが令名はいまだ思つた半分にも達していない。それで、この弓を敵に取られて、義経は小兵だと言われるのは無念である。たとえそれ故に討たれたとしても、それはしかたのないこと、それが義経の運の尽きだと思ふがよい。運が尽きていなければ、敵にわたることはあるまいと、そう思つて波に引かれた弓を取りに行つたのだ。武士の名というものは末代にまで残るのであるから」と語つたので、兼房はもちろんそのほかの人までも、みな感涙を流したことです。

ある箴言にも、「智者は惑わず、勇者は恐れず」といわれていますが、そのように何ものをも恐れない勇者が、弓を敵には渡すまいと惜しんだのは、

詞章・現代語訳についてのメモ

1 〔一声〕は登場楽、《カケリ》は舞事を示し、〔問答〕〔上ゲ歌〕〔クセ〕〔掛ケ合〕などはフシの名称を示しています。

2 「は拍子がないコトバで、劇を進行させるもの、へは拍子に合うフシのことで、人物の感情などが述べられます。

3 「地」は合唱（地謡）の担当する謡ですが、「地」には、シテあるいはツレのセリフ、ワキのセリフ、そのどちらでもない叙景とか作者の言葉などがあります。シテやワキのセリフなどの場合はそれがだれのセリフかはすぐ分かりますが、三つめの「地」は途中からそうなることもあります。

4 左肩の小字は掛詞です。下段の口語訳もなるべくそれをふまえるようにしています。このほかにも能には、縁語・序詞・和歌・漢詩・故事の引用があり、象徴劇としての能を構成していますが、それらは記していません。

5 第1段の（上ゲ歌（又ハ道行））、第7段の（上ゲ歌（又ハ待謡））のカッコ内は能楽の世界では普通に使う用語です。

6 下段は上段の原文にあわせた現代語訳です。

11

〔詠〕

シテ「また修羅道の関の声

地「矢叫びの音震動せり

《カケリ》

〔キリ〕

シテ「今日の修羅の敵は誰そ、なに能登の守教経とや、あら物々しや手並は知りぬへ思ひぞ出づる壇の浦の

〔中ノリ地〕

地「その船戦今ははや、その船戦今ははや、関浮に帰る生死の、海山一同に、震動して、船よりは関の声

シテ「陸には波の桶

地「月に白むは

シテ「剣の光

地「潮に映るは

シテ「兜の、星の影

地「水や空、空行くもまた雲の波の、撃ち合ひ刺し違ふる、船戦の駆引、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れ居る鴨、関の声と聞えしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり、高松の朝風とぞなりにける

名譽のためです。一方、惜しまなかったのは一命で、こうして身を捨ててこそ後世にも令名を残すことにもなり、名を記録に留めることになるのです。

11 終曲

修羅道での闘争の時刻となり、義経は生前の壇の浦での合戦のように、能登守教経と何度も刺し違えて戦ううち、夜明けとなつて、僧の夢も覚める。

義経 ああ、また修羅道の関の声が聞こえてきて、矢叫びの声であたりが震動してきた。

《義経は心を高ぶらせて修羅道における闘争のさまを示す》

義経 今日の修羅道での敵は誰だ。なに、能登守教経だと、ずいぶんたいそうなようすが、手並みはよく知っている。おお、思い出したぞ、壇の浦でのあの船戦を。いまはまた婆婆に帰つて、あのときのように生死をかけた闘争をするこになった。海も山も一度に震動して、平家方の船からは関の声がさがり、源氏方の陸には盾を波のように並べている。月光に白く光るのは、剣の光だ。潮に移るのは兜の星の影だ。水が空か区別がつかず、空にも雲という波が移動している。そうしたなかで、刀を打ち合い、刺し違えて闘うのだ。

こうして、船戦の駆け引きを繰り返して、海に浮き沈みしているうちに、春の夜が波の端から明けて、敵と見えたのは群れている鴨であり、関の声と聞こえたのは浦風であつた。

こうして、夜が明けて、高松から風が吹いてきたのであつた。

『屋島』を観るために

本日の能は『屋島』です。『屋島』にかぎりませんが、能という演劇にはおよそ七〇〇年の歴史があり、そのあいだに当然ながらさまざまな「変化」を経ています。ここではそうしたことをふまえたうえで、『屋島』を鑑賞するのに参考となりそうなことを述べみます。

■なぜ観世流だけが曲名を『屋島』としているのか。

あまり気にならないと思いますが、ほかの四流では『八島』なのに、観世流だけが『屋島』と書きます。もちろん地名としては香川県の屋島ですが、そのかぎりでは『屋島』が正しいのですが、ふしぎなことに昔からの流儀も『八島』です。観世流もかつては『八島』でした。それは屋島での合戦を「八島語り」と呼ぶ習慣の影響かと思われます。観世流だけという場合、観世流が変えたということが多いのですが、『屋島』の曲名表記は十八世紀の観世大夫だった元章からだと思われます。地名としては『屋島』が正しいのです。

■義経はいかなる理由があつて現世に現われるのか。

屋島での源平の戦いは源氏の勝利でした。シテ義経はもちろん源氏の総大将であり、「屋島」は「勝ち修羅」と呼ばれています。ほかの修羅能はほとんど平家方の武将で、これらの能は負けいくさなので、負け修羅になります。修羅道は争いの絶えない苦しみの世界なのですが、世阿弥の「修羅がかり」にはそうしたことは書かれていません。代わりに人間としての悩みが描かれているのですが、『屋島』では弱い弓を流してしまったことが「妄執」となつて、そのために現世に帰ってくるのです。これが義経の「妄執」なのです。世阿弥はこれらを「修羅がかり」と呼んでいます。

■『屋島』のさい「が壇の浦の戦いとなつてゐるのはなぜなのか。

『屋島』のさいこは遠く離れた壇の浦が舞台になったように思つてしまいますが、これは亡者義経の生前の思い出です。ここに壇の浦の合戦を置いたのは、「弓流し」というあの大失態との対比にほかなりません。前場で景清と三保の谷の一騎打ちが語られるのもそのためで、義経は命にかえても惜しくないという名誉を重んじる武将として造形されているわけです。『屋島』の作者とされる世阿弥がそのような能を作つたのは、世阿弥における「修羅がかり」の変化の結果かと思つていますが、ひょつとしたら作者は世阿弥ではなく、その影響を受けた若い役者なのかもしれません。

■本日の『屋島』のアイが「那須語り」ではない理由はなぜなのか。

『屋島』といえは、すぐ想起されるのはアイの「那須語り」です。これはたいへん有名になつていて、独立の狂言として演じられることも少なくありませんが、これは『屋島』から一〇〇年あまり後の考案です。本日は『屋島』がどのような能なのか、また『屋島』が作られたときの姿を強調するために小書ナシになります。どうぞゆっくりお楽しみください。